以下の研究は平成 25 年度徳山大学総合研究所研究（留学生の状況陳述に関する基礎的研究）の一部であり、平成 26 年度日本心理学会第 78 回大会において発表された。

出来事の記憶と第二言語でおこなう報告の正確性

―母語話者と非母語話者による自由報告の比較―

○羽渕由子（徳山大学 福祉情報学部）

キーワード：目撃記憶，非母語話者，第二言語の習熟度

Memory of an eyewitnessed event and the accuracy of a report in the second language: A comparison of free narratives between native and non-native speakers.

Yoshiko HABUCHI (Faculty of Welfare and Information, Tokuyama University)

Keywords: eyewitness memory, non-native speakers, second language proficiency

目　的

本研究の目的は，非母語話者が第二言語で出来事の報告をおこなう際の特徴を明らかにすることにある。対象者から起こった出来事を正確に聞きだすための方法としては，自由報告を主体とした面接法が推奨されている（越智，1998）。その代表的な面接法である認知面接では，“すべて話してください”“文脈を思い出してください”などの，記憶を検索する手がかりを被面接者に提供し，想起を助ける。また，質問は，クローズド質問を避け，被面接者が頭に思い浮かべていることをオープン質問で尋ねることが推奨されている。これらの方法は，非母語話者にも有効であろうか。また，対象者の第二言語の能力によって有効性に違いがあるのだろうか。本研究では，第二言語の習熟度を操作して，出来事の記憶と第二言語でおこなう自由報告の正確性について検討をおこなった。

方　法

要因計画：日本語能力（初級／中級／母語話者）×報告の時期（直後／遅延）の２要因計画で，第一の要因は被験者間要因，第二の要因は被験者内要因であった。

参加者：日本語能力が異なる外国人留学生２群（初級７名，中級７名）および日本人大学生６名であった。外国人留学生の母語は中国語，韓国語，ベトナム語であった。

材料：事故を類推させる約１分間の動画を作成した。動画は，子どもたちが神社の境内で遊んでいる映像で，動画の後半で一人の子どもがフレームアウトした後に水に落ちる音がして映像が終わるという内容であった。この動画に基づき，20 の命題を作成した。20 の命題は動画の正しい内容を反映する５つの正命題と，15 の虚命題で構成された。

手続き：実験は個別におこなわれた。実験参加者は１分程度の動画を見た後，できるだけ詳しく見た映像について母語で紙に書き出すように求められた。筆記再生の後，参加者は見た出来事について日本語で面接者に説明するように求められた。面接では，あいづち，オープン質問のみが用いられた。説明の後，見た映像に対する正しい内容（正命題）と実際になかった内容（虚命題）が口頭で一つずつ示され，“見た”，“見ていない”，“わからない”の３択で答えるように教示された。回答は画面で見たことだけを“見た”と答えるように強調された。遅延報告は約１週間後に偶発的におこなわれた。

結　果

実験参加者の発話を文字化し，アイディアユニット（邑本，1998；以下 IU とする）を分析の対象とした。各群の発話内容について，正項目と誤項目の平均 IU 数を算出した（Table 1）。各条件における誤項目の割合を角変換した値について分散分析をおこなった結果，日本語能力および報告時期については有意差はみられなかったが（日本語能力 $F(2, 17) = .12$，$n.s.$；報告時期 $F(1, 17) = .87$，$n.s.$），交互作用に傾向差がみられたので（$F(2, 17) = 2.90$，$p < .10$），試みに単純主効果の検定をおこなったところ，初級の非母語話者の遅延再生は直後再生よりも誤項目の割合が高いことが示された（$F(1, 17) = 5.77$，$p < .05$）。誤項目について内容の新規性の観点から各群別に分類してみると，非母語話者の２群は遅延再生において，直後再生では言及しなかった新規の誤項目が増加しているのに対し，母語話者は減少している傾向がみられた。

Table 1.　各条件における自由報告の平均 IU 数（*SD*）

	直後		遅延	
	正項目	誤項目	正項目	誤項目
初級	13.1 (6.0)	0.3 (0.5)	10.6 (6.1)	1.4 (1.1)
中級	20.3 (12.0)	1.4 (0.9)	21.7 (8.8)	3.0 (3.3)
母語話者	10.5 (2.1)	1.5 (1.7)	10.8 (2.3)	0.8 (0.7)

次に，直後および遅延の正命題および虚命題への見た反応数について分析をおこなった（Table 2）。正命題への“見た”反応数について２要因の分散分析をおこなった結果，日本語能力，および報告時期の両主効果は有意ではなかった（日本語能力 $F(2, 17) = 2.16$，$n.s.$；報告時期 $F(1, 17) = 1.87$，$n.s.$）。虚命題への“見た”反応数について同様の分析をおこなった結果，報告の時期について傾向差がみられ（$F(1, 17) = 3.85$，$p < .10$），直後よりも遅延の方が虚命題への”見た”反応数が多い傾向がみられた。日本語能力および交互作用については有意差はみられなかった（日本語能力 $F(2, 17) = .22$，$n.s$；交互作用 $F(2, 17) = .97$，$n.s.$）。

Table 2.　各条件における命題への見た反応数（*SD*）

	正命題		虚命題	
	直後	遅延	直後	遅延
初級	3.6 (0.7)	3.1 (0.3)	1.1 (1.1)	1.1 (1.2)
中級	4.1 (0.8)	4.0 (0.8)	0.6 (0.7)	1.1 (1.6)
母語話者	4.0 (0.8)	4.0 (0.6)	0.5 (0.5)	1.0 (0.8)

考　察

言語能力にかかわらず，出来事の記憶は時間の経過によって不正確になる傾向が示されたが，出来事の報告については，母語話者と非母語話者間で，時間の経過によって報告される項目数とその正確性に違いがある傾向が見られた。理由については更にデータを蓄積して検討する必要があるだろう。

引用文献

越智啓太 (2012). 目撃に対するインタビュー手法：認知インタビュー研究の動向. 犯罪心理学研究, 36, 49-66.

邑本俊亮(1998). 文章理解についての認知心理学的研究. 風間書房.

※本研究にご協力くださった参加者および協力者のみなさまに感謝申し上げます。